



怡土城跡郭内遺跡群III

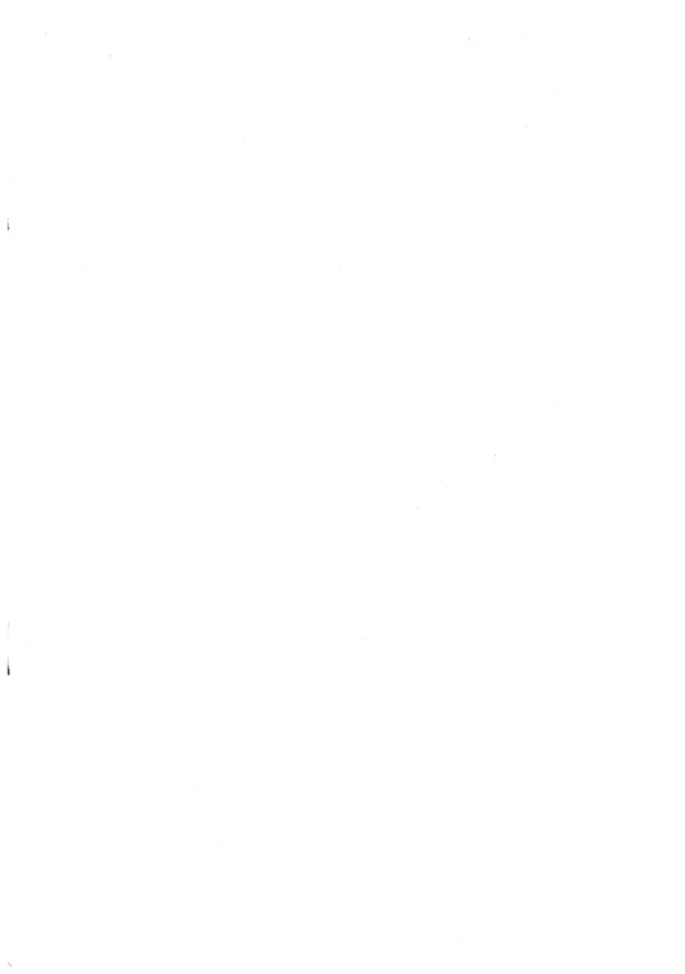
福岡県糸島郡前原町大字高祖・大門・高来寺所在遺跡調査報告

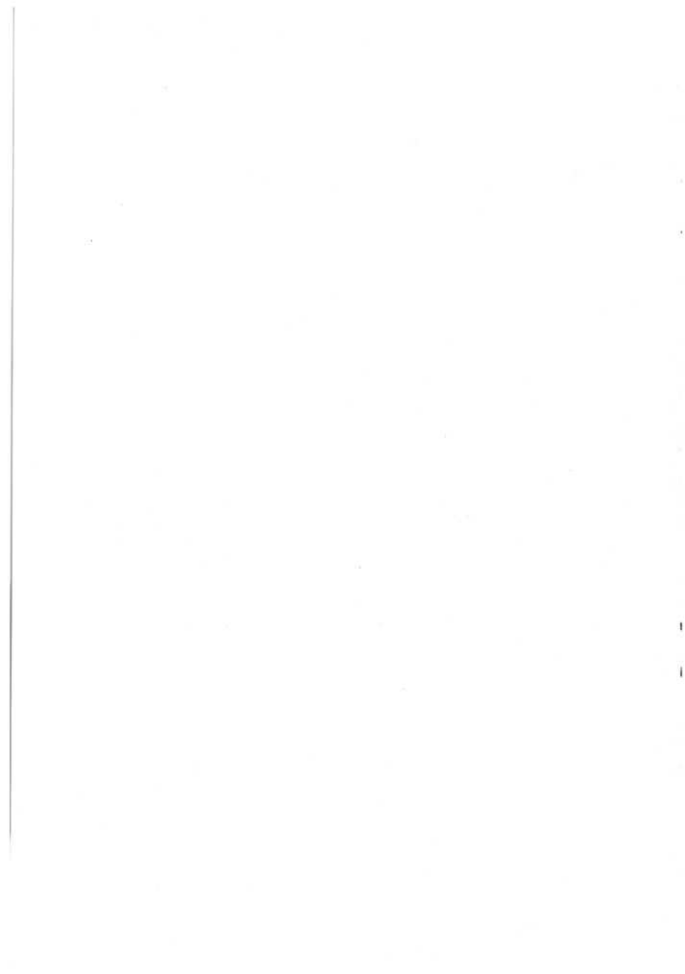
前原町文化財調査報告書

第 22 集

1985

前原町教育委員会





いとじょう
怡土城跡郭内遺跡群III

1985

前原町教育委員会

序 文

怡土城跡は、福岡県糸島郡前原町大字高祖・大門・高来寺に所在する古代山城であり、この報告書は、怡土城跡内に流れる高祖川河川改修に伴う発掘調査の概要です。

この古代山城は、『続日本紀』によれば天平勝宝8（756）年に築城が開始され、神護景雲（768）年に完成したことが記され、その所在地については近世からさまざまな論議がされてきたようです。しかし、故・鏡山 猛九州大学名誉教授によって考古学による調査で、怡土城跡の構造などが明確にされ、昭和13年8月8日に国指定史跡になりました。

よって、現在、前原町では史跡地の公有化・環境整備事業を実施し、怡土城跡の保護・保存に努めてまいりました。

最後に、今回のこの報告が、今後の怡土城跡研究の一資料になればと存じております。なお、調査にあたり、福岡県前原土木事務所・高祖行政区にご協力・ご援助をいただきましたことを心から感謝いたします。

昭和60年3月31日

前原町教育委員会

教育長 豊 島 禮 蔵

本 文 目 次

I 調査に至る経過.....	1
II 調査の内容.....	1
(1) 概 要.....	1
(2) 遺 構.....	3
第1トレンチ.....	3
第2トレンチ.....	6
(3) 遺 物.....	7
(4) 怡土城跡郭内遺跡群出土遺物.....	8

例 言

1. 本書は、福岡県糸島郡前原町大字高祖・大門・高来寺に所在する国指定史跡「怡土城跡」の城郭内に存在する埋蔵文化財発掘調査報告の概要である。
2. 調査は、福岡県前原土木事務所の受託事業として、前原町教育委員会が実施した。
3. 調査などの関係者は、次のとおりである。

河川改修事業 福岡県前原土木事務所

総括	所長（昭和57年度）	久富 雅司
	同（昭和58・59年度）	池浦 正
	次長（昭和57・58年度）	伴 純
	同（昭和59年度）	青木 優
庶務	総務課課長（昭和57・58年度）	同
	同（昭和59年度）	鐘ヶ江満夫
	庶務係長（昭和57・58年度）	森 豊之
	同（昭和59年度）	溝生 昇一
	主事（昭和57・58年度）	岡崎 徳雄
	同（昭和59年度）	池末 文彦
河川事業	工務課課長（昭和57年度）	木部 静哉
	同（昭和58・59年度）	中原 明夫
	第三係係長（昭和57・58年度）	齋田 護
	同（昭和59年度）	池上 清藏
	主任技師（昭和57年度）	小松 幸男
	同（昭和58・59年度）	松村 正勝

発掘調査 前原町教育委員会

総括	教育長	豊島 禮藏
	社会教育課課長（昭和57・58年度）	野坂 猷英
	同（昭和59年度）	中原 直國
	同 文化係係長（昭和57～59年度）	吉村 耕治
庶務	同 社会教育係係長（昭和57・58年度）	中原 直國
	同（昭和59年度）	徳重 認
	主事（昭和57年度）	岡本登美子
	主事（昭和58・59年度）	久保 静代
	臨時職員（昭和58年度）	黒川多鶴子

調査・整理	文化係主事（昭和57～59年度）	川村 博
整理	嘱託（昭和58年度）	常松 幹雄
	主事（昭和59年度）	林 覚
	嘱託（ 同 ）	岡部 裕俊
	補助員（昭和58～59年度）	石井扶美子

4. 本書の執筆は川村が、挿図の作成は常松・林・岡部・石井がおこなった。
5. 本書の編集は川村がおこなった。

I 調査に至る経過

怡土城跡郭内遺跡群は、国指定史跡「怡土城跡」（昭和13年8月8日指定・昭和19年6月5日追加指定）の域城内の周知の埋蔵文化財包蔵地として総称している。この遺跡群は、福岡県糸島郡前原町大字高来寺・大門・高祖に存在する。

このたびの発掘調査の契機は、福岡県前原土木事務所が事業主体となり、高祖川河川改修事業が昭和57年度から実施されることになったためである。

前原町教育委員会では、昭和56年度より福岡県前原土木事務所と福岡県教育委員会文化課との協議と現地踏査を実施し、河川改修事業と埋蔵文化財保護を円滑におこなうことを確認し、さらに、高祖行政区の要望なども考慮することになった。

昭和57年度の事業は、埋蔵文化財包蔵地に河川改修などの施工地域がないので、前原町教育委員会で担当職員の現地立合い調査を実施した。

昭和58年度には、昭和56年度の協議内容をもとに、前原町教育委員会は福岡県前原土木事務所と、埋蔵文化財発掘調査の委託契約書を締結し、前原町大字高祖1437番地などを調査することになった。調査期間は昭和59年2月1日から3月31日であり、調査後の出土遺物の整理は、昭和60年度に実施し報告書などの作成することになった。

なお、高祖川河川改修事業、発掘調査などに伴う関係者は例言のとおりである。

また、発掘調査を実施するまでの経過にあたり、福岡県教育委員会管理部文化課の三池賢一氏（現・福岡県立図書館郷土課長）・磯村幸男氏（主任技師）の指導を得、高祖行政区長菊池大氏（昭和58年度まで）大神哲氏（昭和59年度）には地元での様々の協力をいただいた。さらに河川改修事業にあたり、施工業者の春田建設株式会社（代表取締役社長・春田仁氏）には施工の上での協力をあおぐことができた。ここに感謝して銘記するものである。

II 調査の内容

(1) 概要

怡土城跡は、福岡県糸島郡前原町と福岡市との市町村境界にある高祖山（標高416m）の西側斜面を域城とする古代山城である。

この山城は、過去、鏡山猛氏によって調査され、昭和13年8月8日に国指定史跡として告示され、現在に至っているが、近年、前原町教育委員会では10数度にわたり、域城内の部分的な緊急発掘調査を実施している。また、昭和48年度からは史跡地の公有化、昭和50年度からは環境整備事業を実施している。

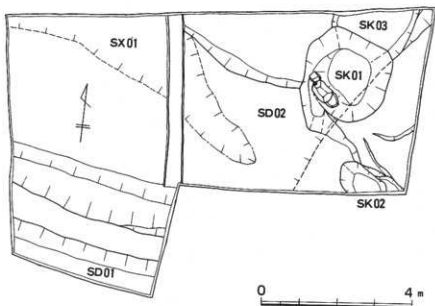
次に、怡土城跡については、『続日本紀』十九巻に記述があり、「天平勝宝八年六月甲辰始めて怡土城を築く、大宰大式吉備真備をして専ら其事を当らしむ」とされ、二十六巻には、「天



第1図 怡土城跡郭内遺跡群地形図 (1/2500)



第2図 怡土城跡郭内遺跡群発掘調査区周辺地形図(1/1,000)



第3図 第1トレンチ遺構配置図

平神護元年三月辛丑大率大式從四位下、今毛人を怡土城專知官となす」とし、二十九卷には、「神護景雲二年二月癸卯築前怡土城成る」と記されている。以上のことから、天平勝宝8（西暦756）年に怡土城が築城されはじめ、神護景雲2（西暦768）年に完成していることが理解できる。

今回の調査は、前原町大字高祖1437番地に調査区を設定して、土塁の内側の遺構の検出等を目的にしたが、その内容は次項のとおりである。

(2) 遺構

第1トレンチ

第1トレンチでは、土壇3基、溝2条などを検出した。層位は、表層（耕作土）、茶灰色砂質土、灰黒色粘質土、地山（赤褐色粘質土）であり、土壇は灰黒色粘質土を切込み、SD01・SX



第4図 第1トレンチ調査状況（西から）



第5図
第1トレンチ東側調査状況



第6図
第1トレンチ西側調査状況



第7図
第1トレンチ調査状況（東から）



第8図 第1トレンチ東側調査状況（南から）

01は灰黒色砂質土を切込んでいる。

溝

S D 01

現況では、調査区第1トレンチの南側に一段高い平坦部があるが、その平坦部の北側、トレンチ内の南側で検出した溝である。埋土は黒灰色粘質土で、深さは約40cmを測る。出土遺物はなく、後世の攪乱であろう。

S D 02

調査区の東西部に溝の上端をみる。埋土は灰色砂質土である。深さ約50cmを測る。

土壌

S K 01

調査区の東側で検出した不整形プランの土壌で、規模が約2.2×2.2m・深さ約1mを測る。遺構の中位に礎石を3・4個を検出した。井戸の可能性もある。出土遺物はなかった。

S K 02

調査区の南東側で検出した土壌で、隅丸長方形プランを呈するであろう。規模は約1.5×1.0m・深さ約0.5mである。出土遺物はなかった。

S K 03

S K 01に切られた土壌で、不整形プランを呈するであろう。深さ0.4mを測る。出土遺物については、他の土壌と同様である。

不明遺構

S X 01

調査区の中央部から北西部に検出した落込みで、北西部の方が低位になっている。

第2トレンチ

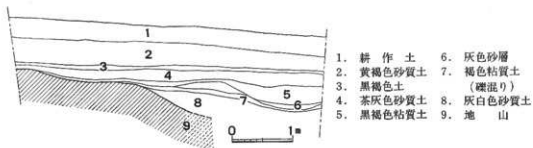
第1トレンチの東側に「L」字状に設定したもので、河川の氾濫状況を観察するために調査した。

第2トレンチの層序は第3図のとおりで、砂質土、粘質土の互層になっている。

現在では河川が第2トレンチの東側で西流から北流しているが、以前は、北流せず西流して



第9図 第2トレンチ調査状況（南東から）



第10図 第2トレンチ西壁土層図 (1/50)

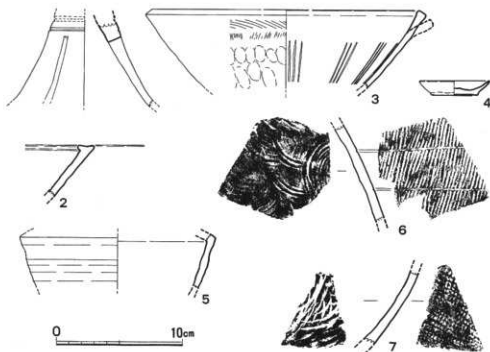
いたものと思われる。出土遺物は耕作土および黄褐色砂質土にみられ、その下層は土師器の少破片をみるのであった。

(3) 遺物

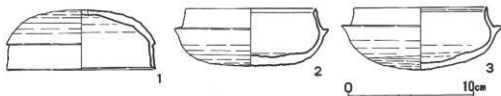
出土遺物は、検出した遺構からの出土遺物はなく、表層などの層位から出土した。

1は須恵器の高杯の脚部で、脚部中位に2条の沈線のみ、長方形透孔を3ヶ所有するものである。時期は小田氏編年ⅢB期である。2は瓦質の摺鉢の口縁部であろう。3は2と同様の瓦質で、片口の摺鉢である。口径22.5cmを測る。外面は口縁部はヨコナデで、ハケメを消している。中位には指頭圧痕成形をみる。内面には3条の沈線をみるが、全周すれば15～16ヶ所であろう。4は口径5.6cm・器高1.2cm・底径3.8cmを測り、外底部は糸切りの土師器である。5は須恵器の長頸壺の破片で、復元胴部最大径15.6cmを測る。内外面ヨコナデ調整である。6・7は須恵器甕の破片で、外面は、6が平行叩き文後に沈線のみ、7が格子状叩き文であり、内面は同心円状叩き文である。

1・2は第1トレンチの耕作土および、茶灰色砂質土の出土である。3～7は第2トレンチの耕作土および黄褐色砂質土の出土である。



第11図 怡土城跡郭内遺跡群出土遺物実測図 (1/3)



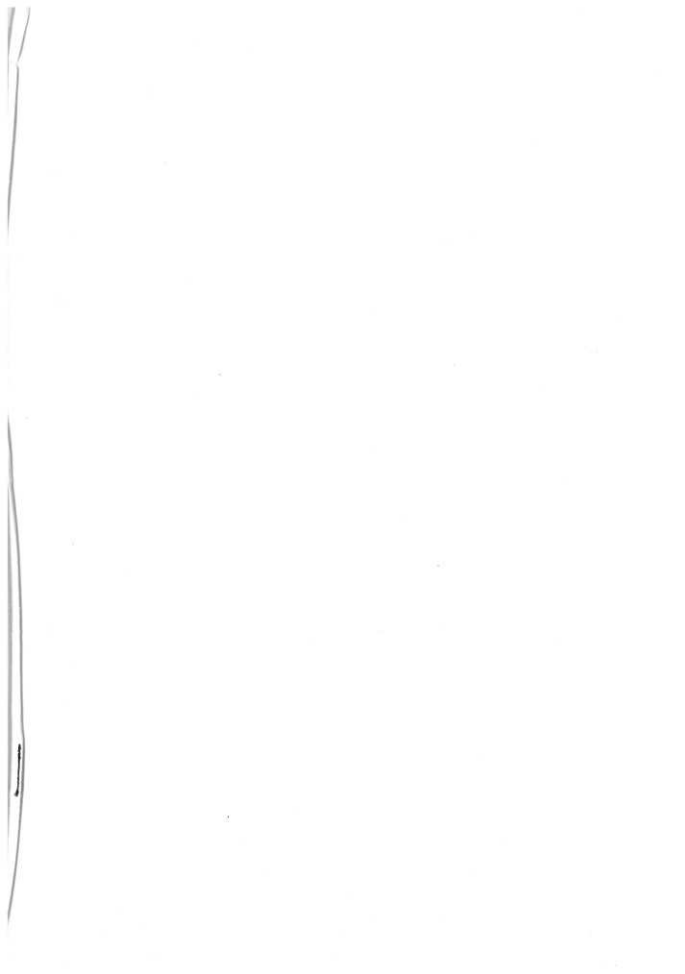
第12図 怡土城跡郭内遺跡群出土遺物実測図 (1/3)

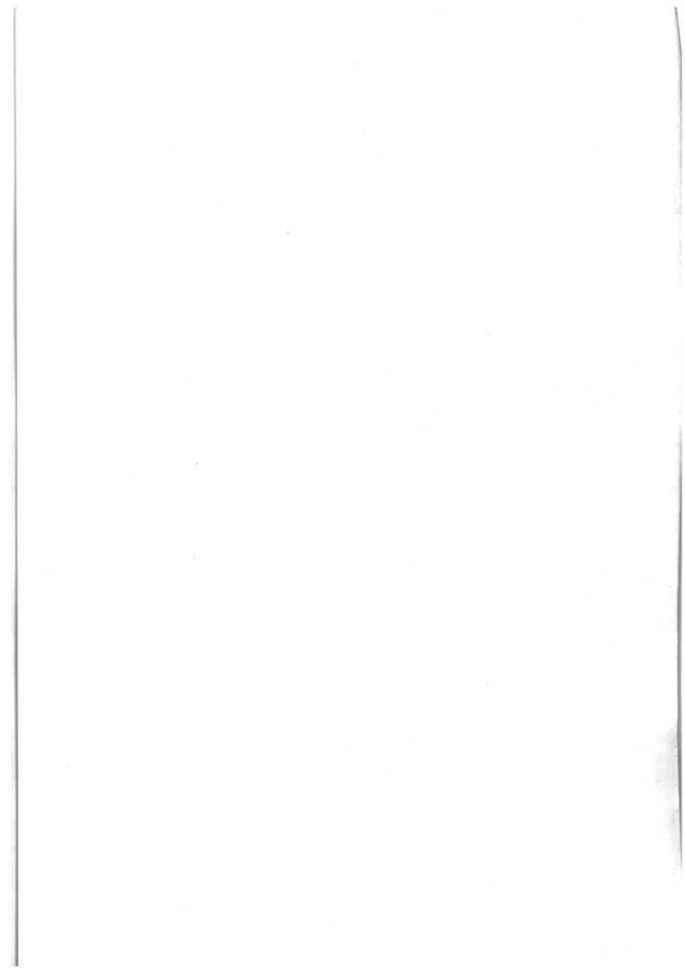
(4) 怡土城跡郭内遺跡群出土遺物

第5図の須恵器は今回調査した東側の宅地で過去に出土したものである。

1は須恵器の杯蓋で、口径11.9cm・器高4.75cmを測り、口縁部は直立し口唇部に段をみる。

2・3は須恵器の杯身で、口径10.3・10.6cm・器高4.6・5.0cmを測る。口縁部は内傾し、口唇部には段をみる。時期は小田氏継年のⅡB期と考える。







怡土城跡郭内遺跡群Ⅲ

昭和60年3月30日

発行 前原町教育委員会
福岡県糸島郡前原町大字前原623

印刷 青柳工業株式会社
福岡市中央区渡辺通2丁目9-31

